

この問題で、一番せねば進めないのは、婚活政策であると思う。生物学科に入学すると、顕微鏡が、各人1台ずつ与えられた。牧野富太郎の「らんらん」で、学生が窓側に一列の並んで、座っている場面が懐かしかった。昔は太陽光を集光してみる光学顕微鏡であった。そのために、窓に向いて座っていた。

学生は、ひそかに顕微鏡でじっくりと覗くのは、自分の精子である。見比べたことがあるが、意外に動きに違いがあった。

最近の若者の精子の動きが鈍く、薄くなったと言う記事を読んだことがある。精子の動きや量の差異は、食べ物と精神的なことが原因である。性欲も同様である。

私が、南極に行った時に、越冬隊の隊員は、帰国すると子供ができると言われた。

一緒に仕事をした隊員で、環境庁からのスタッフで、たくましい男であったが、結婚して、10年ほど子供が出来なかった。我々は、彼に「南極から帰ったら、必ず子供ができるよ！」と慰めていた。通説通り、帰国して子供ができた。精子の量が濃厚になったのである。そうすると性欲を増してくる。

現在の少子化対策は、この基本原理にもどって、精子の活性を高め、量を増やすことであると思う。このような婚活政策を、生物学的な視点から考えることが必要であろう。私は、昔からあった“お見合い”は、良い慣習だったと思う。今の若者は、自分で探す機会は少ない。若い男女が自然に交流する機会を多く作ることである。貧しくても子供はできる。戦後の子供が多くできたことを考えねばならない。